

私の音象徴とオノマトペが 修羅場過ぎる —音象徴をめぐる身体性と 言語・文化—

@nanaya_sac (Twitter自由言語大学)
2012/07/31 TwiFULL SLiM

本日の話題

- ▶ オノマトペと音象徴
- ▶ 今日のお話のきっかけ
- ▶ 音象徴の身体性と言語・文化の影響
- ▶ 音象徴と言語比較
- ▶ 音象徴からオノマトペへ



オノマトペ

- ▶ 擬音語・擬態語・擬情語の総称
- ▶ 音・音声あるいは音の出ない状況・心情を音声で表現する

どんだん



びかびか



どきどき



音象徴

- ▶ 音象徴(sound/phonetic symbolism)
 - 音韻象徴・音声象徴・語音象徴
 - phonesthesia, phonosemantics
- ▶ 特定の語の固有な意味とは別の象徴的な意味、一般に想定されている語と意味の慣習的な関係を超える意味(田守・スコウラップ, 1999)
 - 例: "gl-" がつく語は光・視覚に関連する
 - glitter, glisten, glow, gleam, glare, glint

音韻象徴(phonetic symbolism)

- ▶ 「音声があるイメージを持つ」という現象



maluma

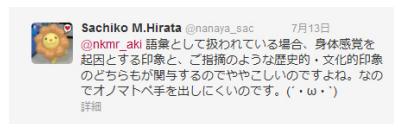


takete

(Köhler, 1929/47; Sapir, 1929)

- ▶ /m/ /l/ は丸くやわらかいイメージ
- ▶ /t/ /k/はとがっていて硬いイメージ

今日のお話のきっかけ



フォロー中

@nanaya_sac まずは身体感覚(非恣意的)と文化的感覚(恣意的)とを区別せずに音象徴を分析して、それからその源がどちらにあるのかを振り分ける(ことができれば振り分ける)という順番が順当なのかなあと思いました。

ですよね・・・(´・ω・`)

個人的興味

- ▶ 音象徴はどの程度身体的性質由来（非恣意的）なのか？
 - 音響的要素
 - 発音時の調音運動経験
- ▶ オノマトペの音象徴による意味推測はどの程度可能なのか？
 - オノマトペの意味に類像性が寄与する度合い

音象徴と身体性

- ▶ 音象徴の身体性に関する説
 - 音響的要素
 - /i/の第2・第3フォルマントは/a/より高い
 - /i/は小さいイメージ・/a/は大きいイメージ
 - 発音時の調音運動経験
 - /a/を発音するときの開口度は/i/より大きい
- 共感覚（感覚間一致）との接点
 - 無意識的音象徴の多言語対照（後ほど）

音象徴に影響するその他の要因

- ▶ 当該言語におけるオノマトペの多寡・役割
 - オノマトペをとおして「音と意味の間に非恣意的な関係」を経験することによる影響
 - このような経験が無ければ、そもそもそのような関係に思い当たらない
- ▶ 当該言語における音韻体系の異なり
 - 異なる言語音として認識されることの必要性
 - 音象徴が完全に音響的性質によるものであれば考慮不要

まとめると

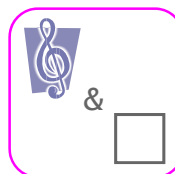
- ▶ 個別の音象徴
 - = 身体性由来の音象徴 + 言語・文化の影響
- ▶ 身体性由来の音象徴を解明するには
 - 言語・文化の影響をなるべく統制した上で、個別言語において見られる個別の音象徴から身体性由来の音象徴を取り上げる必要がある

私の研究

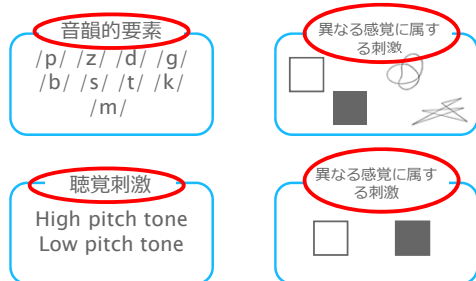
- ▶ 無意識的音象徴の日中比較（博論第二部）
 - 日本語話者 中国語話者
 - ×
 - 有声子音・無声子音 有気音・無気音
- ▶ 日本語
 - オノマトペ 多
 - 音韻体系 有声無声：あり 有気無気：無し
- ▶ 中国語
 - オノマトペ 多
 - 音韻体系 有声無声：無し 有気無気：あり

Cross-modal correspondence

- ▶ 異なる感覚モダリティに属する刺激ペアを一致すると感じる（感覚間一致）



音象徴と感覚間一致の類似点



Garner's speeded classification

- ▶ 感覚間一致の有無及び一致の方向性を測定する実験手法(Garner, 1974)
- ▶ 課題：2種の弁別課題



対象とした既知の日本語音韻象徴

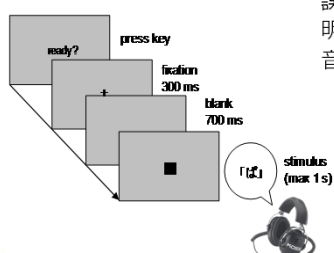
- ▶ 有声子音 (声帯の振動を伴う)
 - /b/ /d/ /g/ /z/
 - 暗いイメージをもたらす
- ▶ 無声子音 (声帯の振動を伴わない)
 - /p/ /t/ /k/ /s/
 - 明るいイメージをもたらす

(Newman, 1933; 雨宮・水谷, 2006)

実験1

- ▶ 実験対象者：日本語母語話者 32名
- ▶ 音声刺激：日本人女性の音声
 - 有声子音+/a/ ば・だ・ざ・が
 - 無声子音+/a/ ぱ・た・さ・か
- ▶ 視覚刺激：白色及び黒色の四角形

実験1：方法



課題：
明度弁別 (黒・白)
音声弁別 (有声・無声)

条件構成

単次元変化条件 課題に関連する刺激対のみ変化

□+/pa/ □+/ba/ ■+/pa/ ■+/ba/

関連変化条件 一致ペア・不一致ペアのみ呈示

□+/pa/ ■+/ba/ □+/ba/ ■+/pa/

直交変化条件 全ての組み合わせをランダム呈示

□+/pa/ □+/ba/ ■+/pa/ ■+/pa/

感覚間一致の指標

一致効果

$$\square +/pa/ \blacksquare +/ba/ < \square +/ba/ \blacksquare +/pa/$$

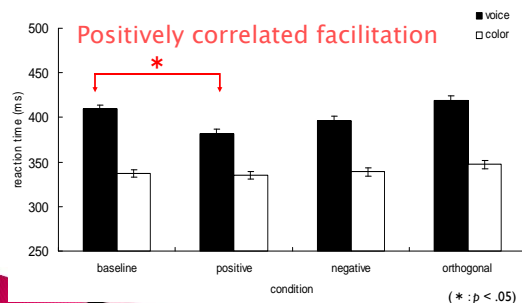
Positively correlated facilitation

$$\square +/pa/ \blacksquare +/ba/ < \square +/pa/ \square +/ba/$$

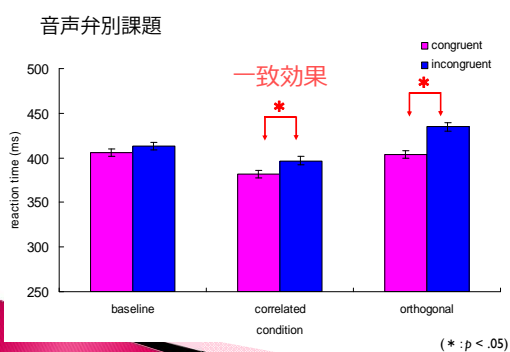
Negatively correlated interference

$$\square +/pa/ \square +/ba/ < \square +/ba/ \blacksquare +/pa/$$

結果 (条件間の比較)



実験1：結果 (一致効果)



実験2

- ▶ 中国語話者を対象とした有声・無声子音の音声と明度の感覚間一致
- ▶ 言語対照における音韻体系の重要性
 - 音韻(phoneme)：意味の弁別をなす最小単位
 - 言語によって音韻数は異なる
 - 例) lace / race 英語では意味が異なる
 - 日本語では区別できない

実験2：中国語話者の音象徴

- ▶ 針生・趙(2007)の指摘
 - 日本語学習経験の無い中国語話者
 - 日本語学習経験のある中国語話者
 - 日本語話者
- ▶ 日本語オノマトベに含まれる有声子音・無声子音を物の大小と対応づけることができるか
 - 日本語話者・日本語学習経験のある中国語話者は可能
 - 日本語学習経験の無い中国語話者はできない
- 有声子音・無声子音と大小を対応づける能力は日本語学習の初期において得られると結論づける

実験2

- ▶ 中国語話者を対象とした有声・無声子音の音声と明度の感覚間一致
- ▶ 実験の目的
 - 有声子音・無声子音を音韻体系として持たない中国語の話者
 - 日本人と同様に有声・無声子音と明度の感覚間一致は見られるのかを検討
 - 母語に含まれない音韻に対して音象徴は見られるか？

実験2：方法



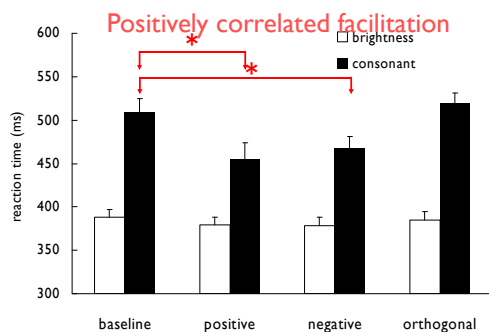
▶ 実験参加者

- 上海市内の大学に在籍する大学生 35名 (うち3名は刺激弁別不能のため除外)
- 全参加者は日本語未学習者

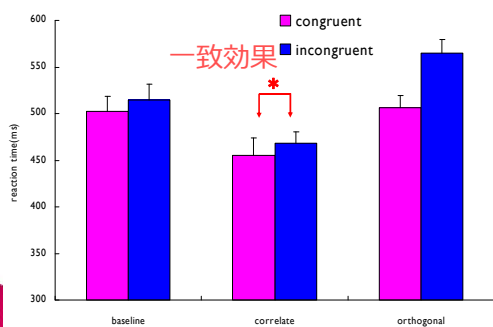
▶ 課題

- 実験1と同様
- 刺激は日本語の音声を使用
「ば・ぼ」「さ・ぞ」「た・だ」「か・が」

実験2：結果 (条件間の比較)



実験2：結果 (一致効果・音声)



実験3

- 中国語話者を対象とした有気・無気音の音声と明度の関係

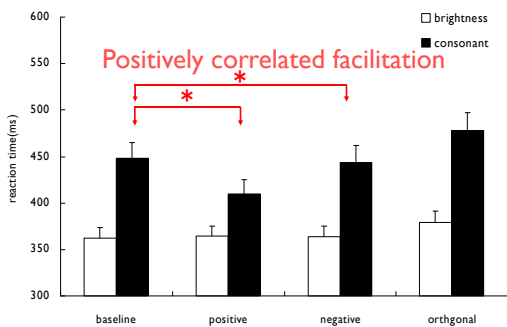
▶ 実験参加者

- 上海市内の大学に在籍する大学生 32名
- 全参加者は日本語未学習者

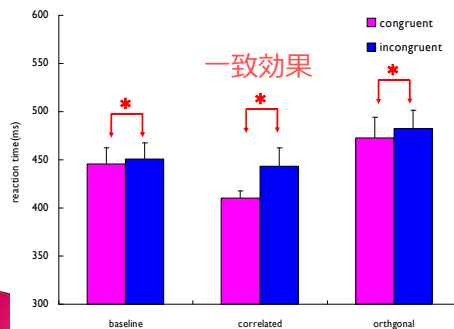
▶ 課題

- 実験1と同様
- 刺激は女性の中国語話者が発音した音声を使用
- 有気音 ([d'a], [g'a], [b'a], [ts'a])
- 無気音 ([da], [ga], [ba], [tsa])

実験3：結果 (条件間の比較)



実験3：結果 (一致効果)



実験3：考察

- ▶ 中国語話者は、有気音・無気音と明度を対応づけることができた
 - 音声刺激の弁別が困難であると申告した者もいなかった
 - 「母語の音韻体系に属する音声」として認識できていたと推測できる

その後の実験結果



考察(日本語話者の場合)

- ▶ 日本語話者は有気・無気音に対して明度との感覚間一致を見せなかった
 - 完全に新奇な音声であったため
 - 音韻象徴が生じるには、既知の言語の音韻であることの認識が必要である可能性

考察 (中国語話者の場合)

- ▶ 音声が中国語の音韻体系に含まれるか否かを問わず、中国語話者は日本語話者と同様の音声に対する感覚間一致を示した
 - 実験に参加した中国語話者は日本語の学習経験は無く有声音・無声音を含む他の言語（例えば英語など）を学習している可能性が高い
 - 中国国内の方言の関与

考察 (中国語話者の場合)

- ▶ 中国語話者が示す感覚間一致の出現には日本語学習の経験を問わない
 - オノマトペに関しては中国語にも存在し、有気音・無気音の変化を含むペアも存在する
 - 日本語の清濁対立のようにはっきりとした意味の対立をもたらす機能は無い(栄, 2011)

まとめ

- ▶ 潜在的音象徴は、母語によって見られ方が非対称的である
- ▶ 音象徴は、当該音声を「ある言語体系に含まれる言語音である」と認識できるかどうかが重要である可能性がある

これまでにわかったこと

- ▶ 個別の音象徴
 - 音韻体系の影響を受ける可能性がある

- ▶ 音象徴からオノマトペの意味へ

- ▶ オノマトペの音象徴＝
 (身体性由来の音象徴＋言語・文化の影響)
 ＋音の配列効果 (言語の影響)
 －当該言語におけるオノマトペの意味

オノマトペの意味と音象徴

- ▶ XY型日本語オノマトペに関しては個々の構成要素から意味が推測可能

(Hamano, 1986)

- ▶ オノマトペは語彙であり、語彙である限り当該言語システムのルールに従う必要がある
- ▶ 音象徴よりもさらに恣意性が高くなってしまふ
 - 一部の音象徴はすでにかなり恣意性が高いのに・・・

オノマトペと音象徴

- ▶ 音象徴の効果を唯一普通語彙として発揮可能なオノマトペ
- ▶ オノマトペの意味をボトムアップ的に音象徴から推測するのは非常に難しい
 - 身体性由来の音象徴の占める割合が低くなってしまふかもしれない

- ▶ (´・ω・`)

コミュニケーションとオノマトペ

- ▶ 1私の研究の始まり
- ▶ 「オノマトペの使用」に付随する状況
- ▶ 会話におけるオノマトペの役割
(文化人類学的な方面)